

命をばぐくむ 霊峰・大山

私たちがすべての命は、
この山の恵みによつて、
生かされている。

大山道

大山寺を中心に発達した参詣道で、坊領道、尾高道、横手道、川床道など幾通りもあり、古くから信仰の道として栄えた。大山博労座牛馬市が開かれるようになると、牛や馬の運搬路としても利用された。写真は横手道。

緑

豊かな山地に囲まれた日本の国土。それぞれの山には神が宿ると伝えられ、人々を抱きながら崇拜してきた。

中国地方の最高峰、標高1729m（※剣ヶ峰）の大山は、古期の成層火山と新期の鐘状火山からできた山で、中国山地から離れ日本海側に突き出ている。先ごろ世界遺産登録された富士山と同じ、独立峰で、裾野に広がる西日本最大級のブナ林をはじめ、ダイセンキヤラボク・ダイセンオトギリなど、「ダイセン」と名の付く植物が多く見られる自然の宝庫だ。

朝と夕、そして季節ごとに異なる表情を見せる大山。その美しく神々しい姿に、昔から大山を望む里に暮らす人たちは、自然の恵みとすこやかな日々への感謝を捧げると共に、山懐を祖先の霊が集まる場所として、大山に向かって手を合わせてきたのである。

古くは「大神山」「大神岳」と称され、伯耆・出雲をはじめ中国地方に暮らす人々の信仰を集めた大山。今回のサイズ特集では、「山岳信仰」にスポットを当て、大山周りに暮らす私たちが「心のふるさと」と仰ぐ気持ちの原点を探ってみた。



写真/柄本孝志

山岳信仰の聖地・ 伯耆国大山寺を訪ねる

シーズン中には、全国から登山客が訪れる大山。しかし、一般の人が山に登れるようになったのは、明治時代以降の事だ。それ以前は古くから山岳信仰の対象とされてきた霊山であり、山自体を神として祀っていた歴史が脈々と続いていた。その聖地として今なお深く息づくのが、大山の中腹・標高750mに位置する「大山寺」だ。

文/島香子 写真/八田純次 デザイン/多田樹子

神の山から修験の山へ

大山寺の創建は、718（奈良時代養老2）年。「大山寺縁起絵巻」によると、出雲国玉造の狩人・依道という人が、ある日、島根半島沿いの海で光る玉を見つけた。ほどなくその玉は金色の狼に姿を変えたため、依道は美保関から大山の山中まで追いかけた。ついに矢を放ち射殺しようとした依道だったが、矢の前方に地藏菩薩が現れ、信心の心がわかに起こり弓矢を捨ててしまった。すると、目の前の狼はいつ



役小角（えんのおつぬ）像（大山寺宝物館蔵）。飛鳥～奈良時代の呪術者で、修験道の開祖とされる。

間にか老尼と化し、依道に話しかけたという。この出来事をきっかけに、依道はすみやかに出家。仏道の修行をへてこの山に地藏権現を祀り、その名を金蓮上人と改め寺を開基したと記されている。本尊はこの地藏権現であり、のちの平安時代、村上天皇より「大智明大権現（菩薩）」とする勅が下されている。

また、寺の正しい名称は、「天台宗別格本山 角磐山 大山寺」という。前述した大山寺縁起絵巻によると、天空はるか彼方の兎卒天（※仏教で弥勒菩薩

が住む所）の角が欠け、大きな磐石が地上に落ちてきた。磐石は三つに割れ、熊野山（和歌山）、金峰山（奈良）、そして大山になったという。このことから山号は「角磐山」と名付けられ、山岳信仰の対象となる霊山の修行場として知られるようになる。山へ籠って厳しい修行を行い、悟りを開くという「修験道の山」として、



山岳信仰ゆかりの民俗

木地師集落・終焉の地

木地師とは、木を伐りお椀やお盆の素地を作り出す職人のこと。9世紀後半、文徳天皇の第一皇子で近江国(滋賀県)に逃れた惟喬親王が口クワで木地を加工する技術を編み出し、木地師に伝えたのが発祥と伝えられている。木地師は免許制で、江戸時代まで全国の山々の8合目以上で木を伐ることが許されたため、良質の木材を求めて集団で移動。寺領の地・大山にも、木地に加工しやすいブナ・トチ・ケヤキなどを求めて入山した。現在の御机・川床・横手・岡山県境の郷原などには、明治時代に衰退した木地師集落があった。

大山博労座牛馬市

1726(享保11)年、大山寺のお膝元・博労座で始まった牛馬市は、日本三大牛馬市の一つ。陸路(大山道)や海路(日本海)を通して牛馬を運搬する馬喰(仲買人)で賑わい、多い時で約1万2千頭の牛馬の取引があった。現在の鳥取県における畜産の歴史を物語るルーツとして、1937(昭和12)年まで続いた。



大山牛馬市図(鳥取県立博物館蔵)

大山伯耆坊(からす天狗)

山の精霊の化身・大山伯耆坊は、「日本八大天狗」の一つに数えられる。強力な神通力を持ち、天気を自由に操ることができるとして、行者たちの心を奮い起す存在だった。大山町宮内の仁王堂公園には、高さ8.8メートル・重さ10トンの大山伯耆坊の像が建立されている。



大山寺 阿弥陀堂
1522(天文21)年に建立された、大山寺境内に既存する最古の建築物。本尊は、1131年に大仏師良円によって造営されたと言われる木造阿弥陀如来で、見学には事前申し込みと拝観料が必要。建物、仏像とも国の重要文化財に指定されている。



上/阿弥陀堂の本尊、木造阿弥陀如来。下/大山寺境内に既存する最古の建築物「阿弥陀堂」。

大山寺塔頭 圓流院
境港出身の漫画家水木しげる先生は、幼少時代から弓浜半島と大山の眺めを愛した1人で、圓流院再建の際108態妖怪天井画を寺から依頼したところ、快諾。そのうちの一枚「からす天狗」は、水木先生の米寿折念と圓流院のために描き下ろした渾身の作。



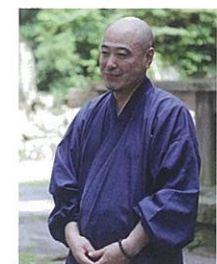
上/圓流院の108態妖怪天井画
左/水木先生の描き下ろし「からす天狗」



右/六十余州名所図会「天野大山遺望」鳥取県立博物館蔵。江戸後期の浮世絵師、初代歌川(安藤)広重が「六十余州名所図会」の中で、伯耆国の名所として、大山麓の春のどかな田園風景を描いている。
左/大山寺の大館神雄住職



大山寺周辺には、寺の本尊が地藏菩薩ということから、今も多くの地藏や石像が鎮座している。「地藏菩薩は、大地のような広い慈悲で、全ての命を何度も救うのです。たとえば、人間がこの世に生きて死ぬまで、命の面倒を見続けてくれるように。」と



大山寺塔頭圓流院住職の大館宏雄さん。

話すのは、大山寺塔頭(支院)圓流院の大館宏雄住職だ。ここ大山に来て、澄んだ空気、風と水にふれると、リフレッシュしてまたがんばろうという気になる。そうして人生のともし火を再び燃やし、いくつになっても転生できること。それが、大山の恵みによって生かされているという事だと教えていただいた。

《取材協力》鳥取県立大山自然歴史館、大山寺住職/大館神雄氏、大山寺塔頭圓流院住職/大館宏雄氏(参考資料)山陽新聞社発行「大山とその自然と歴史」

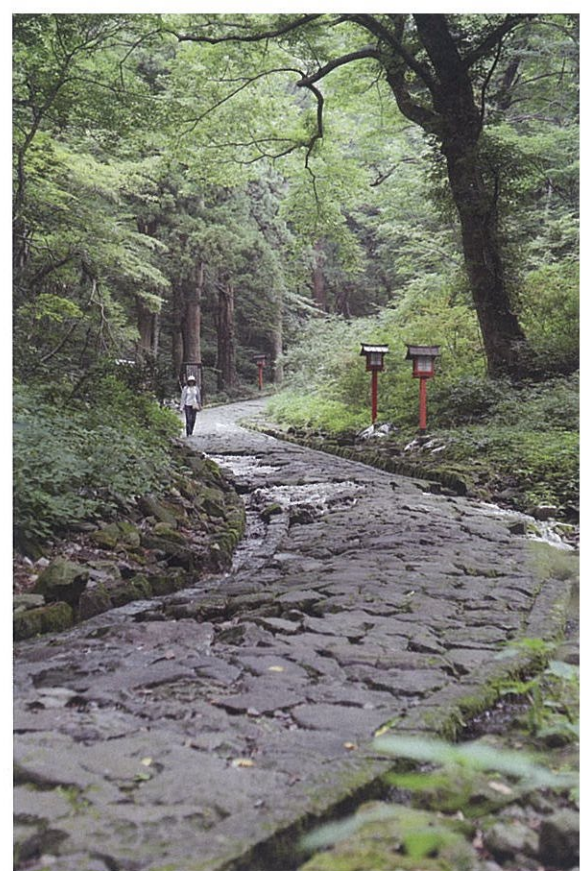
大山寺を彩る時代行列 春の御幸



大山寺への参道を舞台に繰り広げられる春恒例の王朝絵巻。古の装束をまとった年男や稚児、御輿が参道を練り歩く。平安時代に始まったと言われる大山寺の祈願法要で、地元の人からは「大山さん」と呼ばれ親しまれてきた伝統行事。



本堂近くにある「宝牛」。別名を撫牛ともい、二つの願いだけを心に念じてこの牛を撫でると願いが叶うという。



700m続く大神山神社までの参道。自然石の参道としては日本一の長さ。

大神山神社 奥宮

社殿は全国最大級の壮大な権現造り。創建・開創は出雲風土記などに記載あるものの不明とされている。六千坪の境内と湧水、神苑を持ち、その神徳により多くの人々に崇敬されてきた。



大山寺 本堂

山岳信仰に帰依する修験道の修行道場として栄えた大山寺。本堂は、昭和3年の火災で焼失したものを昭和26年に再建したもの。現在もなお、中国地方一円の人々から崇敬を集めている。



全国から行者が入山するようになった。民たちも行者の力にあやかり祈禱を受けたため、霊峰大山と伯耆国大山寺は多くの人たちの心に浸透していった。

幕府から三千石の寺領

今から1100年ほど前の貞観年間、天台宗の高僧・慈覚大師が、大山寺に天台密教と共に「引声阿弥陀経」の秘曲を伝えたことで、修験道から天台宗の寺へ。大山寺は、中国地方はもとより西日本の天台宗の一大拠点となった。12世紀後半までには、中門院・南光院・西明院の3院が成立し、寺の運営は三院の合議で営まれ、それぞれの堂社を核にして僧坊群が形成されていった。中世には尼子氏・毛利氏などの戦国大名にも崇拜され、寺は最盛期を迎えたと伝えられている。

江戸時代に入ると、鳥取藩などとは異なる独自の政治が行われた大山寺。寺領を持ち、3000人ともいわれる僧兵を配備し、領下の小作人から年貢米を納めさせる形は、きわめて特殊なことだ。大山寺は今に至るまで、葬儀は行っても檀家を持たない寺だが、古くは天皇・幕府のための寺(別格本山)だったことがわかる。

ご先祖様に会える寺として

江戸幕府が崩壊し、経済的な基盤であった寺領を失った大山寺は、明治政府の神仏分離政策によって本殿が大神山神社の奥宮に引き渡された上、1875(明治8)年には大山寺号が廃絶さ

大山寺の参道脇や境内には、樹齢500年以上の杉が林立している。江戸時代までは山の手入れが大切にされていた事の証でもある。

